

愛媛大学理学同窓会報

第10号

2017年2月



《目 次》

会長挨拶……………	2	会合だより……………	9
学部長からのひとこと……………	3	会員の広場……………	11
母校の窓……………	3	総会報告……………	13
教室だより……………	5	会計報告……………	14
東京支部だより……………	7	事務局だより……………	14
関西支部だより……………	8	あとがき……………	16



活気あふれる同窓会を目指して

理学同窓会 会長 **東 長 雄**
(昭和45年卒)

皆様には益々ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。昨年9月に理学同窓会総会と懇親会が開催され、遠近より会員の皆様にご出席頂き、盛会裏に終えることが出来ありがとうございました。

総会で会長の大役を再び仰せつかりました。監査及び幹事の方々にも全員留任頂きました。幹事及び皆様方のご協力を得て、同窓会発展に微力を尽くして参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

城尾会長により同窓会活性化が軌道に乗り始めて以降、少額会費ゆえに昨年度まで平均年100万円近くの赤字を計上せざるを得ませんでした。本年度より会費を他学部同窓会並みの2万円に値上げさせて頂きました。これにより赤字を計上することなく、新規事業を展開できる見通しが立ちました。同窓会をさらに活性化し、値上げに応えねばなりません。

在学時（準会員時）から同窓会をよく認知して頂くために、1回生から修士修了まで、途切れることなく在学生を応援する体制を整えつつあります。入学記念品贈呈。1回生時の成績優秀者（学科あたり5名程度）を2回生移行時に理学部が顕彰する際の副賞贈呈。2～4回生に対しては、「理学部学生の汎用的能力育成教育への支援プログラム」に参画。就職支援（会則の事業規定にあり、垣内拓大講師が担当幹事）として求人情報収集のみならず、インターンシップ先企業開拓、キャリアデザイン関連の支援等。優秀修士論文賞の副賞贈呈。

同窓会の大きな目的は、皆様が気軽に集い、会社では話題に出し難い話もできるような会員相互の一体感・連帯感を醸し出すことです。そこで、正会員にはより集い易い環境を提供すべく、昨年関西支部（堀内眞理支部長）が設立され、関東と関西の2支部体制が整いました。支部には毎年一定額の運営費支給と支部総会参加者に参加費の一部支援を行います。

支部のみならず学科同窓会及び講座同窓会、さらにはクラス会等にも、一定の条件の下で、補助金や参加費の一部を支給し、多くの会員が居住地近くで

容易に集うことができるよう計らいます。

同窓会報をより身近なものに感じて頂くよう内容の充実を図ります。支部、学科及び講座同窓会、クラス会等から出して頂く総会・会合報告書が重要な記事になります。

さらなる活性化のアイデアがありましたら、ご提案ください。ぜひ検討させていただきます。

会報と並んでホームページの充実も重要で、より頻繁な更新を行います。Facebookも立ち上げましたのでご利用ください。

理学部とは、組織の独立性を保ちつつ、十分な意思疎通と連携を図っていきます。

会員あつての同窓会ですから、会員及び支部からのご要望があり、それに応えるべく、幹事を交えて議論を交わすことが同窓会の存在そのものと発展にとって重要です。要望の類のみならず、同窓会や会員にお知らせしたいニュース、クラス会などの開催広報等々もお寄せ頂ければ、ホームページに掲載できます。

同窓会の活性化に伴い、事務局の作業量が増大しました。昨年度まで小園愛美さんに週2時間程度の事務処理をお願いしていましたが、本務が多忙となり、長期的にお手伝い願えない可能性が出てきましたので、本年度から赤松博美さんにもお手伝いをお願いしております。事務局には頑張って頂いていますが、事務量が多く、時期によっては、忙殺にうれしい悲鳴をあげることもあります。本部及び支部総会の開催時期やそれに伴う事務量の平準化を考える必要もあります。

最後になりますが、皆様方が、より一層ご健勝にてご活躍されますことを、幹事共々、心からお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

学部長からのひとこと



理学部長 平野 幹

愛媛大学理学同窓会の皆様におかれましてはますますご清祥のことと拝察し、お慶び申し上げます。この場をお借りして、最近の理学部を取り巻く状況についてご紹介させていただきたいと思っております。

みなさんもお存じのことと思いますが、平成26年度末をもって退任された柳澤康信前学長に代わり平成27年度より大橋裕一氏（眼科学）が学長に就任され、愛媛大学執行部体制が刷新されました。理学部関係では宇野前理学部長が理事・副学長に就任され、この新執行部の一員としてご活躍されているところです。私は宇野前理学部長に代わり平成27年度より理学部長を拝命いたしました。甚だ微力ではございますが、本理学部の教育・研究の充実と発展のために専心努力する所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

さて、国立大学は平成16年度から独立行政法人化され中期目標期間が6年毎に設定されているところですが、「強みを作る」第一期、「強みを育てる」第二期を経て、平成28年度より「強みを伸ばす」第三期に移行しました。第二期の後半より国立大学改革が加速され、各国立大学・学部ごとに明確化された「ミッションの再定義」による高付加価値の創出と同時に、グローバル化やイノベーション創出、大学が選択した方向性（愛媛大学は「地域活性化・特定分野重点視点拠点」）に沿った機能強化が求められています。愛媛大学は「輝く個性で地域を動かし世界とつながる大学」の創造することを VISION と

し教育・研究の多岐にわたる機能強化に努めていることころですが、本理学部においても自然科学の探求に勤しむと同時に地域を支える理学系人材の育成機能の強化を進めているところです。そのような中、昨年度より各種ステークホルダーとの協力体制の構築を重点項目として取り上げ、地域経済団体・愛媛県下高等学校教員らを含む外部有識者、理学部在学生の保護者、そして本理学部の卒業生である理学同窓会の皆様との意見交換を積極的に実施し、人材育成強化の点において大学外部との連携に努めています。とりわけ、理学同窓会との意見交換については東会長はじめ役員の皆様のご高配により、在学生への顕彰やキャリア形成協力などの様々なご支援をいただけるようになりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

理学部の最新の教育・研究成果につきましては、ホームページ (<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/>) や「教育・研究のあゆみ」にて随時公開しておりますので、是非ともご参照ください。

今後の理学部の発展には、理学部構成員の研鑽はもちろんステークホルダーの方々のご協力が大きな支えになるものと思っています。同窓会の皆様におかれましては今後とも変わらぬご支援のほどよろしくお願いいたします。

末筆ながら、皆様の益々のご健勝とご多幸を心よりお祈りしております。

母 校 の 窓

母校、愛媛大学理学部では平成27年度末に沿岸環境科学研究センターの田辺信介先生が定年退職されました。次ページに寄稿していただいたメッセージを掲載しています。

最終講義（平成28年3月19日）▶



定年退職を迎えて

田 辺 信 介

東京出張のため、昨年3月の理学部教授会において定年退職のご挨拶とお礼を申し上げる機会を逸してしまいましたこと、お詫び申し上げます。一方、今回、理学部同窓会報で、定年を迎えたメッセージ執筆の機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。

私が愛媛大学と関係を持ったのは、1969年のことで、本学を受験・合格し、その年の春に初めて愛媛の地を踏みました。その後松山での生活が始まり、6年間の学生時代、40年間の教職員時代、合計46年間すなわち約半世紀を松山の地でそして愛媛大学でお世話になりました。この間の3分の2は農学部で、3分の1は理学部およびCMES（沿岸環境科学研究センター）で教鞭を執らせていただきました。本学在職中にはいろいろなことがありましたが、その中で私の学究人生に大きな影響を及ぼした出来事を3つほど紹介したいと思います。

最初の出来事は、私の人生を大きく変えた恩師の立川涼先生との出会いです。立川先生との最初の接点は、3年生の時に農学部で先生の講義を受けたことでした。米国での留学を終え帰国されて間もない先生は、留学中に経験した様々なことを当時はまだ珍しいスライドプロジェクターを使ってわかり易く説明してくれました。特に印象に残っているのは、強烈的な体制批判で他の教授にはない個性的な内容の授業にすっかり魅了され、立川先生の授業だけは教室の最前列に座り、一度も欠席せずに受講したことを覚えています。その後、立川先生の研究室に卒論生・修論生として分属することになりました。当時の私は麻雀狂いの不真面目学生だったのですが、そんな私に興味を持ち、敬遠することなく指導してくれた理由は、「麻雀など賭事に対する田辺の集中力は尋常ではない、このエネルギーを研究に転化できれば、モノになるかもしれない」と思われたようです。とにかく立川先生はヒトや物事を見る目が通例とは違う、すなわち大変人であったことが私にとっては幸いしました。いずれにしても、立川先生との出会いがなければ、今日の私はあり得なかった、立川先生の存在と接点は、私の人生を決定づけた最大の出来事でした。

2つ目の出来事は、1995年に立川先生が高知大学に学長として転任され、私が立川研究室を引き継いだことです。この時、学内外の教職員や研究室の諸先輩方は、「これで立川研究室は終わった、早晚潰れるだろう」と思っていたようで、そうした声が私の耳にたくさん聞こえてきました。これらの風評は私の反骨心に火をつけ、以降 Never Sleep, Study

Hard をモットーに1年365日のうち363日は大学に出勤する、土日祝祭日昼夜を厭わず研究に没頭するといったようなとんでもない生活が始まりました。その効果でしょうか、これまでに300名を超える博士・修士・学士を社会へ輩出できたことに加え、3,500件をこえる著書・原著論文・総説・学会発表そして報告書などの業績を残すことができました。こうした学究活動や40年以上継続した土曜日のゼミなどは、私のわがままを貫いた結果であり、研究室の学生や教職員そしてその家族に多大な迷惑をかけたことは疑いありません。この場を借りて、深くお詫び申し上げます。いずれにしても、今日まで伝統ある立川研究室を潰さなかったことに安堵しています。

さて3つ目の出来事は、1999年にCMESが設立され、私の研究室が農学部から理学部のキャンパスに移動したことです。この移動は私にとって大きな賭けでした。当時CMESには建物がなく、また移動のための好条件が準備されているわけでもありませんでした。したがって、大いに迷い何度も躊躇したのですが、最終的には移動を決断しました。この決断はその後の私の学究人生を大きく好転させました。21世紀COEやグローバルCOE、そして共同利用・共同研究拠点形成事業など文部科学省のビッグプロジェクトに採択されたこと、また基盤Sや基盤Aなどの大型科研費の獲得に成功したことに加え、たくさんの学生や教職員が国際賞や学会賞を受賞しました。こうした成果は、理学部の先生方、特に化学科と生物学科の先生方の協力と支援があったからこそ成しえたものであり、この場を借りて厚く御礼申し上げます。私の研究室は、今後若いスタッフが引き継ぎますが、どうぞ変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

定年退職にあたり、今般これまでの私の教育研究活動を総括した退職記念業績集とそのCDを作成しました。このCDには、私の略歴や職歴、研究教育業績、そして原著論文・総説等のpdfが網羅されており、総ページ数は5,000ページ超あります。業績集の入手を希望される方は、メール (shinsuke@agr.ehime-u.ac.jp) にてお知らせ下さればお届けします。

最後に今後の私の去就ですが、学長の要請もあり、特別荣誉教授としてまたCMESのセンター長としてしばらく留任し、愛媛大学そして理学部の発展に尽力する所存です。学内で私を見かけることもあろうかと思いますが、どうぞ気軽に声をかけていただいて、引き続きご指導とご鞭撻を賜れば幸いです。末筆になりましたが、理学部の発展ならびに皆様方の益々のご活躍とご健勝を祈念しております。

教室だより

[数学教室]

同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝、ご活躍のこととお喜び申し上げます。前回の同窓会報でのご報告以降、この2年間における数学教室の近況をお知らせします。

教員人事では、平成27年3月に内藤学教授が定年退職され、平成28年7月には猪奥倫左助教が准教授へと昇任されました。内藤学教授の後任人事は行われず、残念ながら1名減員となりましたが、一方で若手教員たちの活躍が目立ち、減員分を補っています。学生に関しましては、従来通り中学・高校教員を目指す学部生・大学院生が多く、毎年15名前後が新たに教壇に立っています。民間企業や自治体への就職につきましても、おおむね順調な状況が続いています。

次に、数学教室の最近の話題を2つご紹介します。1つ目は「クォーター制」です。平成28年度より、大半の授業の開講形態を、従来の「週1回×15週」から「週2回×8週」(クォーター開講)に変更しました。学修の効率化と海外留学の促進が狙いです。2つ目の話題は「国際交流」です。現在、山崎義徳准教授がアメリカ合衆国とドイツに1年間の予定で長期出張中です。また、学部生1名がマルタ共和国に留学しました。一方、メキシコから研究員と博士前期課程の留学生を、またフランスから博士後期課程の留学生を各1名、受け入れています。これを機に大学院授業の英語化も進めているところです。

今、国立大学は「社会連携」を強く求められています。数学教室としましては、これまで同様、数学の理論そのものの価値を大切にしていきます。その一方、他分野や産業界との連携に努める必要があります。「国際交流」にしろ「社会連携」にしろ、持続的な活動には、同窓会の皆様のご理解とお力添えが不可欠です。今後とも一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。なお、数学教室の近況は、公式サイト <http://www.math.sci.ehime-u.ac.jp/index.html> でもご覧いただけます。また、毎年11月のホームカミングデイでは、公開講座を開催し、皆様のご来場をお待ちしております。

末筆ながら皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。(松浦 記)

[物理学教室]

皆様におかれましてはますますご壮健にてご活躍のことと存じます。平成27年2月以降の物理教室の動きをご報告いたします。

人事では、平成27年3月に楠瀬博明先生が明治大学に、平成28年3月に谷口義明先生が放送大学に、さらに松岡千博先生が大阪市立大学に転出されまし

た。また中村正明先生が平成27年10月に准教授として着任されました。さらに平岡由布子さんが退職され、代わりに石川由美さんが教育学生支援部から移られました。技術職員の奥村さんは定年後も理学部で働いています。

平成28年12月時点での教室の構成は教員16名、技術職員1名、事務職員1名です。

先日、愛媛大学ホームカミングデイを開催し、同窓生の皆様と旧交を温めました。その折には若い同窓生の個人的な相談も飛び出し、大学時代の雰囲気をもそのまま継続している風景もありました。

平成27年は9人、平成28年は5人の同窓生が遠く松山市まで来てくれました。前回の報告でも教員の紹介をお伝えしましたが、人の入れ替わりも多いのでここで改めて現在の教員を紹介します。理論物理学では、宗博人(素粒子論)、淵崎員弘(非平衡統計物理学)、中村正明(物性理論・統計基礎論)飯塚剛(非線形物理学)、宮田竜彦(統計力学、溶液論)、物性物理学では、栗栖牧生(熱電物理学)、前原常弘(プラズマ理工学)、神森達雄(磁性物理学)、小西健介(磁性・低温物理学)、近藤久雄(光物性)、さらに宇宙物理学では、栗木久光(X線天文学)、寺島雄一(天文学)、長尾透(天文学)、清水徹(太陽系プラズマ物理)、近藤光志(超高層物理学)、鍛冶澤賢(天文学)が学部と大学院の教育研究に携わっています。院生はMC、DC総勢35名、研究室所属の4回生60名がそれぞれの目標に向かって勉学に励んでいます。

人員削減の圧力は未だ弱まってはいませんが、基礎科学を楽しむ心だけは忘れないで全員でこれまで以上に教育・研究活動に励んでいきますので、なお一層のご支援をお願いいたします。最後になりましたが、皆様の益々のご発展を祈念いたします。

(宗 記)

[化学教室]

化学教室は前号(2015年2月発行)の時点から見て、一部顔ぶれも組織も新しくなり、現在5つの系列と9つの研究室があります。有機化学、無機化学、分析化学、固体物理化学、構造化学、複合体化学と、プロテオサイエンスセンター(PROCS)の兼任教員による生物化学研究室、学術支援センター(ADRES)および沿岸環境科学研究センター(CMES)の研究室です。これらが物性化学系、構造化学系、有機化学系、生物化学系、環境化学系の5つの系列に分かれて研究と教育に当たっています。有機化学は、宇野英満教授(理事兼任)、奥島鉄雄准教授に加えて平成27年1月に首都大学東京から高瀬雅祥准教授が着任されました。また、奥島先生は平成27年10月から平成28年9月まで平成27年度愛媛大学外国派遣研究員としてベルギーに留学されました。無機化学は高橋亮治教授と佐藤文哉特任講師で運営されています。なお、佐藤先生は平成28年4月に特任講師の名

称を付与されています。分析化学は島崎洋次准教授に加えて平成27年4月に理化学研究所から座古保教授が着任し、現在この2名の協力体制で運営されています。固体物理化学は内藤俊雄教授と山本貴准教授で運営されています。また、内藤先生は平成27年度に日本化学会学術賞を受賞されました。構造化学は、長岡伸一教授、小原敬士教授、垣内拓大特任講師で運営されています。なお、小原先生は平成27年5月に教授に昇任されました。複合体化学は佐藤久子教授が運営に当たっています。生物化学は、林秀則教授と杉浦美羽准教授で運営しています。学術支援センター（ADRES）は、谷弘幸准教授、倉本誠准教授、森重樹特任講師で運営しています。前号で職位が間違っておりましたが、森先生は平成23年11月に特任講師の名称を付与されています。沿岸環境科学研究センター（CMES）は、田辺信介教授、国末達也教授、野見山桂助教で運営されていましたが、平成28年3月に田辺先生が定年退職され、同4月に野見山先生が准教授に昇任されました。田辺先生は特別荣誉教授として再雇用され、沿岸環境科学研究センター長を務めておられます。以上、現在20名の教員で教育研究に携わっています。（長岡 記）

【生物学教室】

皆様におかれましてはお元気でご活躍のことと存じます。

生物学の近況をお知らせいたします。生物学教室の人事では、小南哲也教授が平成27年3月で退職され、井上幹生准教授は平成27年4月より教授に昇任され、大森浩二准教授は平成28年に新設された社会共創学部にて教授として異動されました。さらに、平成28年7月には畑啓生助教が准教授に昇任されました。

現在の生物学教室では、平成28年度より、沿岸環境科学研究センター（CMES）の3名を含めた15名の教員で教育と研究を行っています。これまでどおり、「形態形成」、「生理・適応」および「生態・環境」の3つの領域に分け、教室の教育と研究を推進しております。「形態形成」領域には、植物形態学の佐藤康准教授と金田剛史助教、動物発生学の高田裕美准教授、進化形態学の村上安則准教授と福井眞生子助教がそれぞれ研究グループを形成しています。「生理・適応」領域では、植物生理学の井上雅裕教授と佐久間洋助教、動物生理学の加納正道教授、魚類環境生理学の北村真一准教授、環境生体応答学の仲山慶助教がそれぞれ研究グループを形成しています。

「生態・環境」領域には生態・進化学の中島敏幸教授、水域生態学の井上幹生教授と畑啓生准教授、動物遺伝学の和多田正義教授、環境毒性学の岩田久人教授がそれぞれ研究グループを形成しています。岩田教授、北村准教授、仲山助教はCMESに所属する教員ですが、これまでと同様に生物学教室の学生の教育を担当しています。平成28年度は、35名の卒

業研究生、18名の大学院前期課程の院生、1名の後期課程の院生が研究に励んでおり、様々な優れた研究成果を挙げております。

平成28年度に新設された社会共創学部が順調にスタートを切りましたが、理学部もこれからの時代や社会に見合った教育・研究の組織へと生まれ変わる必要に迫られています。実際、昨年度に比べ教員2名が減り、講義や運営業務がこれまで以上に厳しくなっています。既に始まっている少子化の問題や社会の変化の中で、愛媛大学の生物分野の教育・研究を担う私たち教員もこれから変革へ向けて頑張らねばならないと思います。これは見方を変えれば、生物学教室がさらに発展するための創造的な活動期に入ることかもしれません。卒業生の皆様からのご助言やご協力を頂けるとありがたく存じます。最後になりますが、卒業生皆様のいっそうのご活躍とご健康を心より願っております。（中島 記）

【地球科学科教室】

理学部同窓生の皆様におかれましては、益々元氣にご活躍のことと存じます。地球科学科の理学同窓会前号（9号）以降の近況をお知らせいたします。前回の同窓会報にご挨拶がありましたように、平成27年3月31日に皆川鉄雄教授が定年退職を迎えられました。皆川先生は、その後愛媛大学研究支援員となられ、引続き「博物館実習」のご指導や愛大ミュージアムの岩石・鉱物系イベント等の学術的監修をなさっております。また平成28年度4月から新しく創設された「社会共創学部」に榊原正幸教授が副学部長として転出されました。榊原先生は学部こそ移られましたが、地球進化学コースの担当教員として現在も大学院および理学部地球科学科の教育にご協力いただいております。研究センターの地球科学系教員では、平成28年7月10日に沿岸環境科学研究センターの板井啓明助教が国立水俣病総合研究センターへ転出なさいました。以上の移動により、平成28年4月から理学部地球科学科は専任教員7名の小所帯となり、学科の運営および野外実習指導等の授業実施がなかなか大変になってきました。これも、本地球科学教室が設立されて以降、地球科学科専任教員が新たに設置された沿岸環境科学研究センターやGRC（地球深部ダイナミクス研究センター）等へ少しずつ“引き抜かれ”転出されたからですが、それだけ地球科学系教員の研究活動や管理運営能力等が皆様に認められているからとも言えます。専任教員数が減少する一方、地球科学科へ入学または2年生から地球科学科に所属して地球科学系の教育コースを選択する学生は近年増加傾向にあります。一時期30数名であった学生数は40名を超えるようになり、平成28年度では2回生は44名、平成29年度も同様な規模になりそうです。このような現状を前向きに捉え、同窓生の皆様と一緒に教員一同、地球科学の発展に今後とも尽力して行きたいと思っております。

ます。おりしも平成29年度（2017年）は、地球科学科が創立されてから40年になります。それを記念して、地球科学科1期生（同窓会）が主体となり地球科学科創立40周年記念会を企画してくださいました。5月の気候の良い時期に開催される予定（学科

HP ご参照下さい）です。今から楽しみにしております。多くの地球科学科同窓生の皆様にご参加いただけますようよろしくお願いいたします。同窓生の皆様の益々のご活躍とご健康を心より祈念いたします。（堀 記）

東京支部だより

理学同窓会東京支部長挨拶

佐伯 雅 弘

理学同窓生の皆様におかれましては、ますますご健勝でご活躍のことと存じます。

昨年9月に行われました東京支部総会にて、伊藤前支部長より引き継いで東京支部長を拝命いたしました。それまでは平成15年より約14年間、東京支部の総務幹事を務めさせていただきましました。私事ですが、思えば30年以上も前の昭和55年4月に2回目の挑戦で理学部数学科に入学させていただきましてから卒業までの昭和59年3月まで、僅か4年間でしたが愛媛大学理学部で多くのことを学ばせていただきました。卒業後は千葉県の公立高校数学科教諭として教壇に立ち続け、現在は市立船橋高校という高校に勤務しております。私が理学部在学中でありました昭和57年に東京支部が発足し、今回その支部長を仰せつかりましたことに、何らかの縁と責任を感じている次第であります。

私が初めて理学同窓会東京支部総会に出席させていただきましたのは、今から約20年以上も前のこと。東京新宿の会場へ在学時にお世話になりました先生が出席されることを知り会場まで一人で足を運びましたが、最初に会場入りする際には物凄く勇気を要したことを今でも懐かしく覚えています。東京支部の総務幹事という業務も、当初は東京支部役員をされておられた数学科の先輩に『任期の2年間だけで

いいから引き継いでくれ。』というものでした。そんな私が14年間も総務幹事をさせていただき、更にこの度東京支部長を拝命させていただいたことは数奇な運命と感じております。と同時に、愛媛大学理学部入学に当初反対していた亡き父の導きかとも考えております。

私が東京支部総務幹事を引き継いだときの東京支部は、支部総会を開催した後に懇親会を実施し、最後に学歌斉唱をして終わるというものでした。しかし現在の東京支部は当時と全く違ったものになってきております。総会の前に理学部の先生より講演をいただき、その後は支部総会・懇親会という流れに発展してきております。更に理学同窓会東京支部という業務にとどまらず、東京支部役員の多くが平成19年に発足した愛媛大学校友会首都圏支部の役員も兼ねており、他学部東京支部との連携業務なども複雑かつ多様化してきております。確かに大変な部分はありますが、14年間の総務幹事を経験してきた中で思うことは「理学同窓会が、よくぞここまで復活してくれました」ということです。一時期、何ヶ月間ではありましたが東京支部は私1人でやりくりし、松山の同窓会本部は亡き野田善郎先生を中心に運営をされていたときがありました。野田善郎先生と私の2人で『今後どうしましょうか…』と野田先



生の研究室で話し合っていたときのことを今も懐かしく覚えております。しかし現在はその頃と比べますと嘘のように活発化の方向で復活してきたと思っています。おそらく野田先生も天国で今の同窓会活動を喜んでおられるのではないのでしょうか。ただ現在の同窓会活動は単純に喜べるものではないとも思っています。特に同窓会会員や役員の新しい加入については、個人情報の問題や同窓会活動の認知度も影響しているのでしょうか、更に新しい風を入れなければならないと痛感している次第です。

東京支部では、これまで年に1回東京支部総会を開催してきております。前述のように支部総会の前には松山からいらっしゃる先生に講演をいただき、支部総会後に懇親会を開催してきました。最近では東京湾クルーズという形で開催し、天候にも恵まれ参加された方々からは好評をいただいております。また現在は役員が単に他学部東京支部総会に出席することにとどまらず、愛媛大学校友会を通じて他学部との交流も活発になってきております。私自身、校

友会首都圏支部を通じて他学部の東京支部後輩と知り合い、東日本大震災の被災地の情報を提供していただき、結果として毎年被災地へ現役生徒を引率することができました。同じように、同窓会活動を多くの会員の方々が様々な方向で利用していただける方向に進めることができましたら、役員としましても嬉しく思うところでもあります。

長くなりましたが、理学同窓生の多くの方々が学生時代に苦しみ悩みながらも卒業という結果を得られたことは、おそらく当時の青春時代が現在も色あせることなく輝いておられるのではないかと察しています。松山市文京町の理学部キャンパスで学んだ事実を縁として、そして同じ首都圏近郊に生活場所を移した卒業生として、松山の本部と連絡を取りながらお互い交流を深め信頼しあえる新たな人間関係を築きあうだけでなく、いざというときには助け合うことのできる東京支部にしたいと思います。

どうぞよろしく申し上げます。

関西支部だより



理学同窓会関西支部長就任のご挨拶

堀内 眞理

理学同窓会員の皆様にはお変わりなく、ご活躍のこととお慶び申し上げます。昨年、関西支部長を拝命致しました。非力でございますが、役員の皆様のお力添えを支えに責めを果たしていきたいと思っております。

同窓会活性化を目ざしての城尾昌範前会長の想いのひとつが、関西支部の結成でした。先生の在任中には実現できませんでしたが、昨年9月、松山での総会で承認をいただき正式に発足しました。国内で2番目の支部です。昭和57年設立の東京支部の実績も参考にさせて頂きながら、また同支部のご協力も仰ぎつつ相携えて同窓会の発展、会員相互の活発な交流を通じて母校の発展をも支える組織となることを願っております。

関西支部発足までの経過を簡単に記します。2010年秋、当時の同窓会長、城尾昌範先生から後輩の私に関西支部設立の準備依頼がありました。当初、設立準備会は全学科の有志でスタートすることを意図しました。しかし理想と現実の差、個人情報保護法の壁をこえられぬまま時が経過しました。15年秋、

東長雄会長から、近畿圏で恒常的会合を持って活動しておられる化学科のグループを紹介頂きました。口コミでの準備委員の勧誘が暗礁に乗り上げていた中での、大きなサポーターの出現でした。昨年7月の関西支部総会の開催は、そのグループを束ねておられる田嶋邦彦氏（理10化・院4化）の強力な統率力と実行力の賜物でした。開催時点では同窓会会則に照らしての支部は存在しないので、本部事業として東会長が「拡大関西支部設立準備委員会」を主催くださり、引き続いて支部総会に移りました。総会では宇野英満副学長に基調講演をいただきました。総会、交流会には、平野幹理学部長、前原常弘教授、石川貴之東京支部幹事にもご臨席いただき、総数50名ほどの会となりました。会場は大正元年に「知の交流と心のふれあいの場」として設立された伝統と歴史のある会員制倶楽部です。倶楽部の建物は国の有形文化財に指定されています。私たちの趣旨にも通じるスローガンを掲げる倶楽部で、記念すべき第1回の総会を開催できた事は何よりと存じます。ご出席の皆様には大阪の近大名建築をもお楽しみいただけ

たかと思います。素敵な会場をお世話くださいました後藤幹郎校友会近畿支部長に御礼申し上げます。

2004年の国立大学の独立行政法人化以降、基礎研究をすすめる環境は運営費交付金の削減で年を追って厳しさを増しているようです。一方で福島原発事故の廃炉費用、東京五輪関連費用等々、収束点の見えぬ数字が跋扈しているのを知ると一抹のむなしさを覚えます。身近なところでも短期の成果を煽る数値目標や単純比較のための数値化がはびこる昨今です。意に沿わぬ強制による、無理な数値化が多くの問題を生じているように感じます。数字の比較は明瞭です。しかし、示された数値を比べ評価する前に、その数値が出される過程や算出方法の開示がどこまでされているか、同じ手順で出された比較するに値する数値なのかの吟味がおろそかにされているように思います。

電子機器やスマホの普及で、人同士の直接の交流が急速に希薄になってきました。このような時代だからこそ、同窓生が一堂に会し親密の度合いを深めることができる場としても、関西支部の催しを活用願いたいと思っております。情報交換や親睦などの他、ご要望、ご提案をお寄せいただければ幸いです。

関西には多くの卒業生がご活躍です。このたびの理学同窓会関西支部発足を機会に、日頃ご親交をお持ちの会員の皆様お誘い合わせて、総会開催の折にお集まり頂き、学科間、世代間を越えた新たな絆を結び、同窓の輪を拡げていただけたら幸いです。是非、若い方にもお声かけをお願いします。

終わりに、会員皆様のご健勝と一層のご活躍をお祈り申し上げますとともに、理学同窓会関西支部の健やかな発展に向けてのご支援、ご助力をお願い申しあげ、ご挨拶とさせていただきます。

会 合 だ よ り

文理学部第14回卒業生の50年記念同窓会

平成28年5月18日、松山市にて文理学部第14回卒業生の記念すべき50周年の同窓会が盛大に開催されました。



第6回生物学教室有志の同窓会

平成28年4月14日、生物学教室同窓会として瀬戸内の旅が開催されました。出席者は約20名でした。



学科や講座などの同窓会が開催され、お便りをいただきました。

構造化学関西支部同窓会

2016年7月23日に大阪府中央区にある大阪倶楽部において、愛媛大学理学部化学科構造化学関西支部の同窓会を開催しました。16名の皆さんにお集まりいただき、楽しい会を持つことができました。卒業してからの各自の経歴や近況報告などを行い、近くにこれだけの仲間がいるということをお互い認識できたことは大きな収穫であります。

これまででも関西では頻繁に同窓会を開いて参りましたが、正式な形ではなく、その時に集まれる方々の集いでした。しかしこれだけ頻繁に開催するのであれば、正式な構造化学同窓会関西支部として発足させ、もっと広く仲間を集め定期的な行事として定着させたいということとなりました。今回の同窓会ではその趣旨を報告し全員の賛同が得られました。今後は更にパワーアップした同窓会を目指して参りたいと思っておりますので、会員皆様の一層のご支援とご協力をお願い申し上げます。(森)



構造化学同窓会関東支部活動報告

構造化学同窓会関東支部より近況をご報告申し上げます。

まずは、同窓会設立において、理学同窓会本部及び理学同窓会東京支部から多大なるご支援、ご指導を頂きましたこと、この紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、構造化学同窓会関東支部は、主に関東地区に居住もしくは勤務する同窓生相互の「絆」、「つなぐ」、「共創」、「親睦」を目的に平成27年2月14日の第1回構造化学同窓会関東支部会において正式に発足いたしました。翌平成28年11月12日には、第2回支部会にて総会を実施し、懇親会と合わせ総勢32名の同窓生のご参加により大いに盛り上がりました。愛媛大学からは向井和男先生、長岡伸一先生、垣内拓大先生、理学同窓会本部からは会長の東長雄先生、さらには愛媛大学ご出身の京都工芸繊維大学の田嶋邦彦先生にもご参加頂きました。

総会では、関東支部代表河野雅弘会長のご挨拶、福田和之総務担当幹事による年間活動報告、江戸武会計担当幹事による会計報告が行われ、平成28年度から同窓会設立準備金と同窓会活動費の補助を同窓会本部より受けながら活動を行っていくことなどが会員に報告されました。また、東長雄先生からは理学同窓会本部の活動状況と課題や同窓生のつながりの重要性についてのお話がありました。

引き続き参加者全員による自己紹介の後、友田英幸幹事からの「構造化学のあゆみ」について1960年代から2010年代の約50年間に亘る構造化学の歩みを約100枚の写真で綴りながらスライドで振り返りました。先生方や元学生の皆様の若かった頃が蘇ってきて、一瞬にして当時の若者に戻ることができました。約50年間という歴史ある構造化学研究室であるからこそ多くの同窓生が多方面でご活躍されていることを再認識しながら、大いに盛り上がりました。

そして特別講演として長岡伸一教授による「唐様で売り家と書く三代目」と題した現在の愛媛大学理学部の状況と先生ご自身の研究成果に関する大変興味深いご講演を賜りました。

前半では、ご子弟が理学部を受験される際、どの大学を選択すればいいのか、教育カリキュラムや卒業後の進路状況を卒業生の事例も入れて紹介頂き、理学部における「基礎科学研究」の重要性をご説明頂きました。

さらに後半の構造化学研究室の現状につきましては、分子軌道計算をエクセルでさせることで学生に量子化学を理解させたことや光化学反応の研究、分子用ナイフに関する研究、アンチエイジングに繋がる抗酸化反応の研究などをわかりやすくご紹介頂きました。

その後、場所を移しイタリアンレストラン「ブラチェリア BAVA」において、懇親会が催され、ここでもまた大いに盛り上がり、旧交を深めることが

できました。また今回、長岡伸一先生の還暦のお祝いを構造化学関西支部と連携してサプライズで企画し、大変喜んで頂きました。

これらの活動は、日々多忙な業務の合間に幹事が力を合わせ、理学同窓会本部や関西支部の方々とも協力しながら進めた結果、多くの方々にご参加頂くことでまさに「絆」、「つなぐ」、「共創」、「親睦」をすこしでも実現することが出来たと思います。構造化学同窓会のような活動が他の学科、学部でも広がっていき、連携しながらさらに発展していくことを願っております。

辻田 隆広（理・化学21回）、江戸 武（理・化学18回）



有機化学同窓会関西支部発足会

愛媛大学理学同窓会の関西支部の発足会が7月23日に大変歴史ある大阪倶楽部で行われ、正式に理学同窓会の関西支部が発足しました。その際に引き続きサテライト同窓会として有機化学および構造化学研究室の合同OB会が開催され、さらにその中で有機化学研究室の関西支部の第1回同窓会を開催する運びとなりました。

本会は構造化学と合同で行われ（有機化学10名、構造化学は18名）、自己紹介、会則の制定およびそれぞれの支部長の選出を行いました。

突然の研究室関西地区同窓会とのことで準備不足ではありましたが、すでに活動を行っている構造化学関東支部の会則を参考にして有機化学関西支部会則を制定することを確認し、その後支部長として、その場の最年長として吉田が引き受けさせていただくことになりました。自己紹介では、時々顔を合わす方、何十年ぶりの方、まったく初めて（のはず）の方など様々でしたが、それぞれ当時の記憶を呼び起こし懐かしく楽しむことができました。

有機化学は宇野先生も含めて今回は10名の参加者

でしたが、関西地区にはもっと多くのOBの方々がおられるものと思っています。今後は組織を整えるとともに、より多くの方にも声をかけご参加いただける、参加したくなる同窓会にしていければと思っています。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。



会員の広場

もう一つの卒業論文

化学科13回卒業

理工学研究科博士後期課程2001年修了 森本千恵

4回生での卒論移行先としてどこの講座・研究室を選ぶかは一つの大きな決断であった。理由はさておき、私はかなり早い頃から「構造化学」志望で、念願通り配属することができた。当時の講座は、教授が石津和彦先生、助教授は向井和男先生、それから私たちが4回生になると同時に助手になられた田嶋邦彦先輩（現・京都工芸繊維大学 教授）という先生方で構成されており、元気な講座であった。そして、私は向井先生の研究室（向井研）に入った。

当時の向井研は、一期上の先輩方が全員女性だったことから、「向井女学院」などと呼ばれたりもしていた。私たちの配属と入れ違いで修士課程の先輩が修了され、一期上の先輩方は全員就職されたため、私たちの学年は卒論生のみ6名（男子3名、女子3名）となった。しかし、田嶋先生はじめ石津研の修士の先輩方が優しい方たちばかりで、様々な場面で丁寧に教えてくださったり、助けてくださったりした。田嶋先生や何人かの先輩は30年以上経った今でもずっとお世話になっている。

向井研には、「向井研ノート」という研究室の出来事や自分たちの日常を綴った、いわゆる日誌のようなものがあつた。それは秘密裡に書かれたもので、向井先生にはもちろん、決して向井研以外の目に触れるものではなかった。当然、私たちもそれを引き継ぎ、日常の出来事や実験の進行状況、また時々の想いを綴っていった。結局、B5サイズのノート10冊にも及んだ。

向井研ノートは、3月24日の先輩方の卒業式の日から始まっていた。最初は自分たちが合成や測定に使う試薬の蒸留に関することから始まっていた。少し抜粋してみる。

『3月26日 AM 1:05 昨日からずーっとエーテルの蒸留をしっぱなしで、頭が変になってしまいました(K) (※注:卒論生の一人。ノートにはイニシャルのまま)』

『3月28日 小野くん (※注:卒論生の一人)、昼から Benzo-15-crown-5 の、ろ過採取したけれども、な・な・なんと、PM10時までかかってしまった。俺は怠慢少年です。今、“清酒”月桂冠をグイグイ飲みながら書いてます。…途中、田嶋先生、Sさん、Fさん、Oさん(※石津研の修士課程の先輩方。ノートには実名で記載)が来られて自分にプレッシャーを与えてくれました。感謝致します。』

『6月29日(水)きょう私は、2本測定(ESR)して2敗した。今月に入って、合計20本、うち、2勝16敗2分。大きく負け越してしまいました。もうあまり元気がありません。ショックのあまり、身も細る思い… (※注:森本の記述)』

ノートは、書いた者が机の引き出しに隠していたのだが、あるとき、誰かの不注意で机の上に置きっ放しになっており、田嶋先生や石津研の人たちの目に触れることとなった。それ以来、向井研ノートは秘密裡ではなくなってしまった。

当時、土曜日はいわゆる半ドンで朝から実験していたが、午後からは比較的自由であった。向井先生は、土曜の午後になると決まってどこかに行かれて夕方まで、時には夜まで帰って来られなかった。当然、そんなこともノートに書いた。するとあるとき、「それは、きっと碁を打ちに行かれているんだよ。」と先輩から情報が入った。好奇心旺盛な私たち卒論生は、ある土曜の午後、こっそり向井先生の後をつけていった。そして先生がある喫茶店に入っ

て行かれるのを確認し、またその店では多くの人たちが囲碁を打っておられることも確認した。早速、ノートに、『あっ!! いない!! ピンときたならすぐ電話〇〇〇〇(※注:店の電話番号) 本格囲碁喫茶△△(※注:喫茶店の店名)』と書き込んだ。そのことも確か秘密だったはずだが、なぜか後日、当時の有機化学講座の助手の先生(※注:現・京都大学教授)に「森本さん、向井先生をあまりいじめないように。イヤ、ボクは何も聞いてないけど…」と注意(?)されてしまった。そのことがどうして有機化学の先生にまで知れ渡ってしまったのか。実は、有機化学講座所属の卒論生にまで向井研ノートを見られていたのだった。見られるだけでなく、書かれてもいた。なお、囲碁喫茶の記述は、卒論生の一人がB4サイズの紙に書いて、普通には視界に入って

こない実験室の天井近くの壁に貼っておいた。後日、それに気付かれた向井先生が、それが誰の仕業かまらず疑われたのは私だった。勿論私が書いたのではなかったが、日頃の行いのせいで真っ先に疑われたのであった。

今、手元にあるのはノートのコピーであるが、読み返してとても懐かしく感じる。火が出たり、水浸しになったり、研究室旅行ではスピード違反で捕まったりと、様々な事件が起こったが、それらを面白おかしく時にはイラスト入りで書いている。私が一番不真面目であったが、それでも全員がよく実験していて、実験が成功しても失敗しても毎日が楽しく、活気があったことを物語っている。

「向井研ノート」は、私たち6人の卒論生にとってはもう一つの卒業論文であった。



「愛媛大学」と「ギター」と「水族館?」

生物学科27回(平成10年)卒業

愛媛県立長浜高等学校 理科教諭 水族館部顧問 **門田 将和**

私は、愛媛県立長浜高等学校理科教諭水族館部顧問の門田将和と申します。よろしくお願ひいたします。出身は愛媛県今治市で、愛媛県立今治西高等学校から、平成6年に愛媛大学理学部生物学科に入学し、平成10年に卒業しました。卒業後、愛媛県の高등학교の理科教諭として採用され、現在に至っております。今回は、現在私が行っている仕事や活動を紹介し、そのルーツが愛媛大学に存在するという話をさせていただきたいと思ひます。

愛媛大学に入学後、所属したサークルは、「ギタークラブ」です。ギタークラブでは、クラシックギターを練習し、毎年1回定期演奏会を開催しました。高校時代はフォークギターを趣味にしていたのですが、ギターという楽器をより深めていきたいという気持があったので、クラシックギターを選びました。クラシックギターは、ピアノと同様に、1つの楽器で音楽を完成することができます。持ち運びが容易で、会場にイスが1つあればコンサートをすることができ、歌や他の楽器の伴奏もできるという長所があります。その長所を最大限発揮できたのが、私の職業である教師という場所です。ギターを持って教室に入ると、教室がコンサートホールに変身します。

私は理科の教師ですが、教師には、専門教科の事だけではなく、スポーツの指導や生徒の心のケアなど、幅広いスキルが求められます。大学在学当時は、まさか教室でクラシックギターを演奏することになるとは思っていなかったのですが、今となっては愛媛大学での経験が私の職業に最大限に活かされていると感じています。プライベートでも県内各地で演

奏活動を行っており、「松山クラシックギタークラブ(MCGC)」の会長をしております。MCGCでは、2ヶ月に1回、ホールで発表会を行い、年に1回定期演奏会を開催しています。このように、私とクラシックギターは、職業やプライベートにおいて密接に関わっており、これから一生付き合っていくでしょう。愛媛大学で、クラシックギターと出会った事に本当に感謝しています。

私は理学部生物学科出身で、生態学研究室に所属し、魚類の生態について研究しました。在学中は、柳沢康信先生、大森浩二先生など、多くの先生方にお世話になり、本当に多くの貴重な経験をさせていただきました。その経験を職場である高等学校で、生物の授業や、部活動など、多くの場面で活用することができています。幼い頃からの夢は、魚類の研究をすることと、水族館の職員になることでしたが、私の努力不足から夢は叶わず、少しでも得た経験を世の中の役に立てたいと思ひ、教師という職業を選びました。

教師生活の9年目に、現在の勤務校である愛媛県立長浜高等学校に赴任しました。本校には、全国初の高校生が運営する水族館である「長高水族館」が存在します。長浜高校に生物教師として赴任することは、水族館の運営をするということになるので、いつの間にか、水族館の職員になるという夢が叶ってしまいました。赴任当時は、研究室の先輩である松本浩司先生(現在愛媛大学附属高等学校)、現在は、長高水族館を立ち上げた、同じ理学部生物学科出身の重松洋先生に引っ張っていただきなが

ら、本当に充実した日々を送っています。

長高水族館は、水族館部員が運営し、150種2,000匹の生物を飼育しています。毎月第3土曜日11:00～15:00には、一般公開しています。一般公開では、水族館部員がお客様に生物の解説をし、美術部が塗り絵や展示物を作成したり、商業科目選択生徒がオリジナルパンを販売したりと、全校生徒がお客様を「おもてなし」します。入場無料ですので、ぜひお越し下さい！私は一般公開の中で、クラシックギターBGM生演奏をしています。

本校では、水族館を活用した、生徒による課題研究活動も行っています。高田裕美先生、村上安則先生、北村真一先生など、多くの愛媛大学の先生方に研究指導をしていただきました。特に、高田裕美先生には、長年手厚い指導をしていただき、カクレクマノミとハタゴイソギンチャクについて深く探究することができました。平成26年には、ハタゴイソギンチャクの刺胞射出にマグネシウムが関係し、カク

レクマノミは粘液中に高濃度のマグネシウムを保持することにより刺胞射出を防いでいるということを発見し、日本で最も権威のある学生科学コンテストである日本学生科学賞で、日本一の内閣総理大臣賞を受賞しました。その翌年には、世界最大の学生科学コンテスト Intel ISEF（インテル国際学生科学技術フェア）で動物科学部門4等を受賞しました。このような大きな成果を上げることができたのは、愛媛大学のサポートのおかげで、本当に感謝しております。私自身、研究指導や英語でのプレゼンテーション指導、ISEF参加など、本当に貴重な経験をさせていただきました。

以上のように、私が行っているギターの活動、水族館の活動のルーツは、愛媛大学にあります。これからも愛媛大学との結びつきを深く感じながら、活動を続けていきたいと思っています。毎月第3土曜日は「長高水族館」へ！！



総 会 報 告

平成28年9月3日(土)14:00から愛媛大学南加記念ホール(旧記念講堂)で総会が開催されました。総会に先立ち、愛媛大学理学部長の平野幹先生から「理学部の現状について」と題する講演会が行われました。小休止の後、総会に移り、東長雄同窓会会長の議事進行により、平成26年・27年の活動報告、会計報告が行われました。また、東会長から「同窓会活動のさらなる活性化」にむけての最近の活動について報告がなされました。また、今年度から愛媛大学理学同窓会の関西支部が設立されましたので、関西支部長である堀内眞理氏からご挨拶と現状についてのご報告をいただきました。その後、役員承認では、東同窓会会長が再任され、監査役に桑原英了氏と二宮啓二氏が再任されました。続いて会則に従って会長推薦により副会長および幹事が委嘱されました。東京支部兼任幹事の交代と関西支部兼任幹事の参加および新幹事3名が紹介されました。向こう2年間は下記のメンバーが中心となり同窓会を運営す

ることになりました。最後に、理学同窓会東京支部の栗原氏による東京支部の活動報告があり総会を終了しました。

理学同窓会役員

〈顧問〉

- 平野 幹 《理学部長》
- 亀岡 久志 《理学部事務課長》

〈会長〉

- 東 長雄 《文理：化学 18回》

〈副会長〉

- 仲田 秀雄 《文理：物理 20回》
- 大谷 勲 《理学：数学 5回》

〈幹 事〉

- 岩本 孝 《理学：物理 1回》
- 永井 博 《理学：化学 2回》
- 奥田 一品 《理学：生物 8回》
- 佐々木靖夫 《理学：生物 8回》



千葉 昇《理学：地球 1回》
 谷 弘幸《理学：化学 12回》
 森本 千恵《理学：化学 13回》
 小笠原恵子《理学：地球 5回》
 高田 裕美《理学：生物 16回》
 鎌田 浩子《理学：化学 19回》
 辻田 隆広《理学：化学 21回》
 池上 亨《理学：化学 23回》
 垣内 拓大《理学：化学 33回》

二宮 啓二《理学：化学 14回》

総会の後、会場を大学会館食堂2Fのリーセスへ移し、恩師5名のご臨席のもと32名の参加者で懇親会が開催されました。東会長の挨拶に続いて平野理学部長の祝辞の後、鈴木仁美先生の乾杯ではじまり約2時間旧交を温めました。最後に井上直樹先生の音頭により万歳三唱をして、2年後の再会を約し、懇親会を終了しました。

〈監査〉

桑原 英了《理学：地球 5回》

会計報告

平成26年度 (2014.4~2015.3)

収 入	支 出
平成25年度より繰り越し 会費(234人) 利子	通信費 ¥51,813 名簿管理費 ¥368,280 東京支部会補助 運営費 ¥500,000 会報発行費 ¥312,289 卒業生記念品 ¥1,026,544 総会準備 ¥197,391 平成27年度へ繰り越し ¥689,194
収入計 ¥22,836,434	支出計 ¥22,836,434

平成27年度 (2015.4~2016.3)

収 入	支 出
平成26年度より繰り越し 会費(229人) 利子	通信費 ¥51,774 名簿管理費 ¥306,720 東京支部会補助 運営費 ¥500,000 学生支援費 ¥226,990 平成28年度へ繰り越し ¥415,078
収入計 ¥20,840,417	支出計 ¥20,840,417

事務局だより

本部事務局より平成28年秋からの主な活動を報告し、原稿募集のお願いをいたします。

1. 役員会の開催

平成27年度の定例役員会を8月26日に開催しました。13名の役員が参加し、1年間の活動報告・計画を説明して論議しました。また、10月13日に10名、

11月15日に12名の役員参加で臨時役員会を開催し、同窓会費について話し合いました。

平成28年度の役員会を4月26日に13名、6月13日に11名の役員が参加して開催しました。主な議題は、関西支部設立準備と総会開催準備についてでした。総会を9月3日(土)に開催し、その時の講演会を愛媛大学理学部長の平野幹先生にお願いすることとなりました。平成28年8月25日に松山近郊および東京支部の役員が集まり総会の準備、役割分担等を協議して開催に備えました。なお、総会当日の詳細は総会

の報告等を参照してください。

2. 会報の発行

平成20年9月に城尾会長の下に理学同窓会の活動を活性化することになり会報も2年ごとに発行することになりました。前号の会報9号は平成27年2月に発行しました。新同窓生には卒業式に手渡すことができました。本同窓会の会員は約8,000名ですが、連絡先が判明している3,421名に会報を送付しましたが、あて先不明で返送されてきたものが多数ありました。住所を変更された方はメールまたは同封の連絡ハガキにて同窓会にお知らせくださるようお願いいたします。また、平成28年9月の総会后、会報第10号(本会報)発行の準備も進めてまいりました。

3. その他

平成26年度、27年度の卒業式当日に新会員(卒業生)約300名に記念品(26年度は同窓会名入りのボールペン、27年度は同窓会名入りのエコバッグ)を贈り、住所連絡用の書類を渡して新しい住所が決まったら同窓会に連絡するようお願いしました。卒業記念パーティーでも東会長が挨拶において重ねてお願いしました。この他に、ホームページの更新、会員名簿の管理も随時行っています。

4. ホームページの原稿募集のお願い

理学同窓会のホームページ(<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>)では下記の2項目について同窓生の皆様からの原稿を募集します。投稿は郵便かメールでお願いいたします。なお、これらの原稿は同窓会報にも掲載させていただく場合があります。また、より多くの会員の近況を事務局で把握するために、同窓生による小規模な同窓会の開催やユニークな活動をしている会員の情報、さらに本同窓会員が職業や社会活動などにより受賞をしたというようなニュースなどもご存知の方は事務局へお知らせください。

《会合だより》

同窓生の皆様の会合開催等の原稿を募集しています。それぞれの学科で同期会等を多々開催されるとお聞きします。今後はこの様な会を開かれたら本部事務局にもご一報くだされば幸いです。ホームページで報告したいと考えています。写真も歓迎します。

また、会の開催案内もホームページの“ニュース”・“会合だより”により広報できると思いますので、是非ご活用ください。

《会員近況》

近況報告欄の原稿を募集します。同窓生の皆様の近況をお知らせください。写真つきも歓迎します。ふるって投稿ください。お待ちしております。

送り先

宛 名：愛媛大学理学同窓会

住 所：〒790-8577 松山市文京町2-5

メール：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

愛媛大学基金について

愛媛大学の財政基盤強化の一環として平成28年4月に愛媛大学基金が創設され、第三期中期目標(平成28年度～平成33年度)の6年間で3億円を各方面からの寄付等により調達・活用することが決定されています。

学内の各学部同窓会及び後援会に対しても、昨秋以降、大学執行部等から、その説明及び協力依頼がありました。以下の記述は、同封依頼を受けた『愛大基金のパフレット等』と合わせてお読みください。あわせて皆様の基金へのお力添えをお願いします。

理学同窓会に求められている寄付は、一般基金の範疇であり、「学生の教育活動に対する修学支援事業」に活用される計画です。より細かく云うならば、グローバル人材育成/国際交流活動を支援(海外語学研修等の費用の一部)するものです。

特に、理学同窓会及び理学部後援会からのグローバル人材育成に資する事業(海外語学研修等)に係る寄付金は、理学部学生に対してのみ使われる計画で、参加学生等の増減等から発生する年度の学部寄付金に残余が生じた場合には、次年度に繰り越す予定です。

一般基金の他の事業項目(フィールドワーク、インターンシップ支援等)については、当該学部学生支援ではなく全学の学生支援の計画のようです。

この支援事業の全費用が同窓会及び後援会からの寄付のみで賄われるわけではなく、大学の努力による企業等から得られる資金も一般基金に繰り入れる計画だそうです。

次回の定期同窓会役員会で議論して頂く予定ですが、他学部同窓会の動きを見渡すと、理学同窓会も応分の寄付が必要かと考えております。

あ と が き

教育改革に関し、平成28年3月に高大接続システム改革会議「最終報告」が公表されました。この中でいま初等中等教育及び大学教育に強く求められているのは学力の三要素、すなわち(1)基礎となる知識と技能の習得、(2)自ら課題を発見し自ら解を見だしていく思考力・判断力・表現力等の能力を育む、(3)主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を養うことです。これにより高等学校教育から大学教育、また義務教育や社会との関係までを含め改革内容をシステムとして新たな仕組みの創造に向かっていきます。

本年の愛媛大学ホームカミングデイの式典挨拶で大橋学長から国立大学改革プランとして愛媛大学の改革ビジョンについて説明がありました。本年度は第三期中期目標期間の初年度。持続的な競争力を持ち高い付加価値を生み出す国立大学へと独自の強みを伸ばすとして、「輝く個性で地域を動かし世界とつながる大学」を目指しているとのことでした。

改革に伴い平野理学部長も様々なアイデアをもって臨まれており、本同窓会に対しても深くご理解いただき多大の関心をもって協力いただいています。東同窓会長は理学部のますますの発展に向け同窓会

の果たすべき役割は何か、どのように在るべきか、できることは何かについて学部長と意思の疎通を図りながら確実な支援のため腐心されているところです。現在、同窓会の活動として在学生支援や就職支援また社会で活躍されておられる会員からの相談支援などについて実践や検討を重ねています。会員の皆様からの情報、活動の様子などもお待ちしております。お気軽に本部事務局までお寄せください。

ところで、「基本」とはそもそも論に通じています。「科学に携わる者」の立ち位置、構えの基本とは何でしょうか。「絶対に緩まないネジ」の開発で注目を浴びている道脇裕氏は「頭は心の道具である」という印象的なことを言われています。問題は心にある。答えが見つからない時は常識の外に出ることも考えるべきだと。もしかすると教育も研究もそして生きることも、まずは心のありよう心の構えが肝要ということでしょうか。心を基盤とし、「考え」がすべてを創り動かしているとも言えます。ともすると科学という思考は存在するものを等しく物質とみなして「いかに」存在しているかに関心が強く、「存在している」とはいかなることかを考えない傾向があるとの指摘もあるようです。新たな時代に向けた大きな社会変動の今、新たな価値を創造していくための資質を伸ばす上でも「自らが考える」ことが基本となるのは確かなことのように思います。(I. O)



愛媛大学理学同窓会 会報 第10号 (文理学部同窓会報より通算22号)

平成29年2月 発行 愛媛大学理学同窓会

〒790-8577 松山市文京町2-5 愛媛大学理学部内 FAX: 089-927-8424

メールアドレス: rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

ホームページアドレス: <http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>